

書評 Maris Boyd Gillette, *Between Mecca and Beijing: Modernization and Consumption among Urban Chinese Muslims*

著者	李 天国
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	43
号	3
ページ	82-85
発行年	2002-03
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007918

書 評

Maris Boyd Gillette,

Between Mecca and Beijing: Modernization and Consumption among Urban Chinese Muslims.

Stanford: Stanford University Press, 2000,
xiv+279pp.

李 天国

I 本書の問題意識, 構成

本書では、政府によって規定される「現代化」というイデオロギーが、漢民族を主要住民とする西安における最大の伝統的なイスラム系回族コミュニティにどのような影響を与えるか、という論点が探究されている。

本書から分かるように、西安の回族コミュニティの回族にとって、「現代化」というイデオロギーには2つのモデルが存在している。ひとつは中国政府が定めた「現代化」イデオロギーモデル（北京）である。もうひとつは回族人たちの宗教的なルーツである中東の進歩的な国々から来た「現代化」イデオロギーモデル（メッカ）である。この2つの「現代化」イデオロギーモデルはいずれも回族の消費活動に大きな影響を与えている。回族はこの2つの「現代化」イデオロギーモデルの間での消費活動を通して、自分たちの位置を捜し求めている。言い換えれば、彼らは消費活動を通して、自民族のアイデンティティを再構築している。

回族の消費活動はなぜ前述した2つの「現代化」イデオロギーモデルに影響されるのか、どのように影響されているのか、消費活動は彼らの求めている「現代化」にとっては、なぜ重要になるのか、アイデンティティを再構築するにあたって、消費活動と「現代化」はどのようにかかわってくるのか、「現代化」

というイデオロギー的な言葉はマイノリティの回族にとって、何を意味しているのか、政府に定められた「現代化」という概念は回族人たちの日常消費にどのような影響を与えているのか、政府が定めた「現代化」の目標に対して、回族人たちが理解している「現代化」目標とはどのようなギャップがあるのか、このギャップは消費活動にどのように反映されているのか、などの問題が本書を通読することによって、よく理解されよう。以上の各点はまた著者の問題意識の所在だと思われる。

本書の各章の構成は下記の通りである。

- 第1章 現代化と消費
- 第2章 住居, 教育および民族
- 第3章 モスク, コーラン教育およびアラビア化
- 第4章 伝統的飲食および民族
- 第5章 工場で加工する食品, 現代化および民族
- 第6章 飲酒とひとつの文明社会の構築
- 第7章 ウェディング・ドレスと現代化
- 第8章 消費と現代化

II 各章の内容紹介

著者は自分のインフォーマントの2人の回族の女性と親交する過程で、彼女たちが日常の消費活動を評価するときに、イデオロギー的な言葉である「現代化」、「封建」、「伝統」などをよく用いることに気づいた。この「発見」から、回族の人々は、なぜ日常の消費活動を評価するときに、イデオロギー的な言葉である「現代化」、「封建」、「伝統」などを頻繁に用いるのか、ということを考えることで、著者は第1章のスタートを切っている。

第1章は本書の序章と言ってもいい。著者はこの章で問題意識、目的、方法などを明らかにしている。少し具体的に述べてみると、著者はまず、回族コミュニティでよく耳にした「封建」という言葉とそれに関連のあるいくつかの言葉の由来とその意義を考証している。それから、民族、文化、国家といった言葉を用いて、本書における意味と3者の関係および旧ソ連と中国の民族政策について述べている。この部分を通して、西安にある回族コミュニティを、民

書 評

族・文化・国家という視点をも取り入れて議論しようとすることを明らかにしている。続いて、1949年以後の中国政府による国内少数民族に対する識別の問題点（識別とは、中国国内にあるエスニック・グループの民族的出自と民族呼称を弁別することを指す）を指摘しながら、回族はひとつの少数民族としてどのように認知されたか、その歴史、宗教などを具体的に紹介している。

それから、1979年前後の「現代化と消費」の異同を具体的に紹介している。そして、著者は本書の問題意識について「現代化というイデオロギー・カテゴリーに属する言葉が人々の消費活動にどのように影響しているか、また消費活動という言葉が現代化というイデオロギー・カテゴリーに属する言葉にどのような影響を与えるか、ということの解明を通して、1990年代の中期に回族が自民族のエスニシティをどのように再構築したかを明らかにする」と述べている。著者は第1章の最後で、自分はなぜこのような研究をしたか、フィールドワークをどのように展開したかなどの調査方法を紹介している。

第1章が本書の序章をなすのに対して、第2章から第7章までは本書の実証的な部分を構成している。すなわち、著者はフィールドワークを通して、「現代化」と消費活動の関係を実証しようとしている。では、それぞれ第2章から第7章までの主要内容を見てみよう。

第2章は住居、教育、民族という3つのキーワードを使って、ひとつの生活空間としての西安回族コミュニティの独自性を証明している。少し具体的にしてみると、著者はまずこのコミュニティの地理上の位置、歴史的沿革、人口規模、モスクを取り巻いて住居を定める特徴、自営業を中心とする職業構造、エスニック色に富む小さい店舗の興隆、宗教施設としてのモスクの特徴、民族教育の現状、などを詳しく紹介している。以上のような紹介を通して、生活空間としてのこのコミュニティの独自性あるいは西安のほかの地域と異なる特徴も明示している。政府は公式にこの地域を回族コミュニティと指定しなかった。しかし、この地域に居住している回族は、ちょうど著者が紹介した以上の様々な独自性によって

自分たちを周囲の漢民族社会と区別している。周囲の漢民族社会もそれらの回族の独自性によってこのコミュニティを独特な地域とみなしている。言い換えれば、これらの独自性によってこのコミュニティに属する人と属さない人を分類している。ひとつの見えざる境界線が引かれているのである。

しかし、回族は今彼らの独自性を構成している部分を懸命に変革しようとしている。すなわち、回族はこれらの独自性を消費活動で現代化させようとしている。これを可能にさせる制度的な支えのひとつが1978年からの改革・開放である。すなわち、個人経営、私的経済活動が認められたことによって、回族人たちは独自のスモールエスニックビジネスを通してこれらの独自性を現代化させる経済力を得ることができた。もうひとつは少数民族政策の転換である。すなわち、文化大革命時代の宗教を制限するなどの一元的な民族政策を是正することである。

それから、回族の消費活動と現代化を直接に結びつける重要な要因は、「より進んだ発展段階にあると称する漢民族」と「遅れた少数民族」というステレオタイプ的な発想に対する回族人たちの反発にある。すなわち、回族の人々は現代化を代表できる商品（テレビ、冷蔵庫、水道）が消費できることで、自分たちは漢民族より「遅れた少数民族」ではなく、むしろ、経済的に自立し、漢民族より進歩的であるということをも懸命に証明しようとしている。

第3章では、中国の回族を語る時、イスラム教を抜きにして語れないという点を指摘している。なぜかという点、中国語を母語とする回族にとっては、イスラム教は彼らのエスニシティを支える最重要な要素だからである。そこで、著者は以下のように「2つのモスクについての物語、アラビアと宗教改革、モスク、モスクを語る、アラビア語とコーラン、アラビア語学習についての簡単な歴史、コーラン教育を語る、アラビア化と現代化、アラビア化と政府、モスクのスタイル」のようなサブタイトルで第3章をまとめている。

以上の各サブタイトルを通して、回族はイスラム教という接点を通して、アラビア世界にどのように繋がってきたか、あるいはこれからどのように繋が

書 評

っていききたいかなどを詳しく紹介している。たとえば、1978年の改革・開放後、回族とアラビア世界との人的な交流の増加に伴って、回族の宗教様式はすでに「漢民族化」したイスラムから「アラビア的なイスラム」へと回帰する現象が見られる。具体的に述べると、回族コミュニティで過去に建築されたモスクはほとんど漢民族的寺院様式とイスラム的建築様式の融合であったのに対して、最近建てられたモスクはもっぱらアラビア式のモスクになったことである。このような変化の背後に見え隠れしているものは西安の回族の宗教的なイスラムへの回帰である。

第4章のタイトルは「伝統的飲食および民族」である。周知のように、イスラム教は豚肉を禁止する。そこで、回族も独特な飲食文化を擁している。この独特な飲食文化は一方では回族の独特な飲食消費のパターンを形成し、他方では、改革・開放後、飲食業は彼らのビジネスを支えるひとつの重要な基盤をなしてきた。

この章では、回族の独特な飲食ニーズは彼らにどのようなビジネスチャンスをもたらしてきたか、これらのビジネスチャンスは彼らのエスニシティをどのように支えているか、また食品消費の背後に隠れている民族問題等を詳細に記述している。

第5章は第4章を受けて、さらに、現代的な工場加工した食品に対する回族人たちの消費心理の変化を検討している。言い換えれば、食品消費と現代化の関係を具体的な事例として検討を加えている。

第6章では、著者は回族コミュニティの反アルコール協会の出現の過程を詳しく紹介している。この協会の人々は自民族の若者の飲酒者が増加していることと、飲酒が原因となる低次元の社会現象の頻発に対して、もともと飲酒を禁止するイスラム教の戒律を利用して、回族コミュニティにおいてひとつの反アルコール運動を展開しようとしていた。反アルコール協会の最大の狙いは社会にひとつのイスラム的な文明様式を提示したいということにある。言い換えれば、飲酒することと飲酒しないことで回族と漢民族を区別しようとする。飲酒しない回族は飲酒する漢民族より文明的であることも証明しようとした。著者の言葉を引用すれば、「運動そのものは政府

による発展と現代化という概念に対する疑問である。なぜかという、彼らはイスラム教の中からひとつの文明様式を見つけたからである。

第7章では回族女性の婚礼にかかわる消費過程を細かく紹介している。彼女たちが何を選び、何を選ばないかということが「現代化」という観念にどのように影響されているかということを通して、回族の人々が独自性を再構築している事実を強調している。

第8章は本書の最後の章である。「現代化と消費」という第1章のタイトルに対して、最後の第8章は「消費と現代化」になった。第1章のタイトルの「現代化と消費」を本書の仮説とするならば、最終章のタイトルの「消費と現代化」はひとつの結論と見ることができる。なぜかという、著者は回族人たちの消費活動をまず現代化というイデオロギー概念を通して理解することから説き起こした。それから、第2章から第7章までの実証研究によって、ようやく消費活動を通して「現代化」を見ることが可能になったからである。

実は、消費活動を通して、人々は自分および自分が属する集団のイメージを再構築することができる。それは同時に自民族以外の人々に自分と自分が属する集団に対する従来の見方を変えさせる機会でもある。回族の消費活動過程は上述したことを反映している。消費品の実用性は言うまでもないが、その実用性の背後に隠れているものとして、なぜそれを選んで消費するかという価値観も無視することができない。著者はちょうど消費活動の背後に潜在する価値観の変化をフィールドワークという方法で捉えた。たとえば、住居、アパート、モスク、コーラン学校、伝統イスラム食品、お酒、婚礼衣装といったものは実用性があると同時に、ある種の意味を擁している。その意味とは西安の回族がなぜ現代アラビア式教育を選んで、伝統的なモスク教育方式を選ばないか、なぜウェディング・ドレスを選んで、伝統的な民族衣装を選ばないのかということである。この種の選択過程に大きな影響を与えるのは、中国政府が定めた「現代化」モデル（北京）と回族人たちの宗教的なルーツである中東の進歩的な国々のモデル（メッ

書 評

カ)である。

社会主義計画経済時代に比べ市場経済時代は、政府による個人の消費に対するコントロールと影響力が低下しつつある。個人は消費に対する選択肢の拡大によって、自民族の独自性を構築、再構築するチャンスを得る。これから、回族は引き続き自主的な消費活動の拡大を通して、北京とメッカの間で自分たちが望んでいる位置を捜し求めるであろうと著者は言う。

III 本書の特色と評価

本書を通読して、何より著者が数多くの一次資料を用いたことを評価しなければならないと思う。本書は著者の1994年1月～95年8月の18カ月余りのフィールドワークに基づいてまとめたものである。著者はこの長期間にわたる現地調査のほかに、1994年、96年、97年、98年に4度の短期訪問も行っている。このようなフィールドワークと数度の訪問があったからこそ、極めて豊富な現場感覚を感じさせる回族に関するアーバンエスノグラフィを私たちに提供してくれたのである。この種の実証的な研究に際しては、おそらく自分が研究したい対象とどのように向き合うかという問題に必ず直面するだろう。著者の場合、受け入れ機関である陝西省社会科学院歴史研究所の存在以外にも、自身の努力がフィールドワークの成功の大きな要因のひとつだと思う。著者は回族コミュニティの6つのムスリム家庭に深く入り込み、緊密な関係を結んだ。著者の多面的な物の見方はこの6つの家庭に深く影響された。これは著者がこのコミュニティをフィールドワークとするにあたって最適なインフォーマントになったに違いないと思う。この6つの家庭と絶え間なく交流する以外にも、著者はこのコミュニティの200人と10カ所のモスクをインタビューした。しかも、著者がボランティアという形で回族中学で英語を教えたことは、回族の教育状況を知る絶好のチャンスとなった。著者の

以上のフィールドワークの際の努力は、本書の第2章から第7章の実証部分に随所に窺われる。評者はそれらの実証部分における著者の鋭い観察力と調査データの綿密さに常に感銘を受けながら、本書を読み終えた。

著者は自分の観察を記述する以外にも、回族コミュニティの住民をたびたび登場させて、彼らに自分たちのコミュニティの出来事をより鮮明に語らせる。このような方法で、読者に現地の人々の生の発言と考え方を明示して、より一層臨場感を与えている。著者の論考に一層の「力」を添えたという感じがした。

本書のテーマをエスニック・コミュニティとエスニシティとして捉えてもいいと思う。エスニック・コミュニティとエスニシティは著者の母国のアメリカではよく取り上げられるテーマであるが、多民族国家の中国では近年になって、ようやくテーマ化しつつあるという状況にある。特に、改革・開放後の市場経済の進行に伴って、都市部の既存のエスニック・コミュニティのマイノリティによるエスニック・ビジネスが盛んになってきた。少数民族のビジネスエリート層も形成されつつある。彼らは地域社会のエスニシティに新たな活力を注いでいる。ある種の自民族のアイデンティティを再構築する動きがよく見られる。本書は「消費と現代化」という新鮮な切り口でその新しい動きを見事にフィールドワークという形で捉えた。その点において、本書のテーマは中国社会を研究する最先端のテーマのひとつとも言えよう。

著者の少数民族の現代化に関する中国政府の役割に関する見方には、評者はすべては賛同ができないものの、本書は現代中国都市部を生きるイスラム系少数民族の回族の日常生活の現実を知るために、得がたいアーバンエスノグラフィとも言えよう。

(明星大学非常勤講師)